母の実家を語る３　わたしの脳裏にある弘前の風景と味

koberyo1

雪国の冬は長い。雪に閉ざされて半年も生活をすることを余儀なしとされる。なんといっても我慢することに慣れている人でないと、雪国での生活はおぼつかないのではないだろうか。

雪国の経済活動は活発である。まず輸送手段としては自動車のタイヤはその頃、まずもって不向きであった。現在は除雪車が動いているので便利になったが、昭和20年代には、重いものはもちろんのこと、人の雪上での移動は馬に橇を引かせる「馬橇」がおもな移動手段であった。

馬橇は荷台のの重心が低いので、雪上ではこの上なく安全な乗り物であった。積雪があると、市内外を問わず、これを使っていた。馬に大きな鈴をつけてシャンシャンと鳴らしているのをみたことがある。

純粋な方言を聴きたいな、と思い、弘前駅なら人も多く集まるだろうと思い、行ったことがある。そして待合室へといってみた。ここでは大きな声はもちろんのこと、あたかも津軽弁の展示会とでもいったような様相を呈していた。わたしはそのとき、津軽弁がとびかう宇宙、坩堝のなかにいた。それぞれがおそろしくディープな津軽弁を話していた。耳をそばだてて会話を聴くのだが、いったい何をいったいるのだ。サッパリわからないのである。コトバのイントネーションが波のように上がったり下がったり。声に色を感じる。あたかも別世界か、外国にでもいったような気分になる。ねじり鉢巻のオジさんや、頬かぶりのオバさんやら、子どもたちがリンゴをかじっている。大きなニギリ飯をだれもが恥ずかしげもなくかぶりつきながらノンビリとしている。

おおきな荷物が構内のあちこちに雑然と並べられている。魚くさいものもある。売店も朝早くから店をあけている。ベンチで仮眠をとっている人もいる。なんとも雑然したなかで喋る声、ざわざわとやかましいが、これが郷愁を感じさせるのである。

年寄りの娯楽は湯治場にあるが、若者の娯楽はといえば、当時は映画である。市内には一軒だけだが映画館があった。「弘前大劇」という大きな劇場がそれである。終戦後、ここでは拡声器をつかい、並木路子がうたう「りんごの唄」がくりかえし、エンドレスで流されていた。この歌はほんとうに市内を明るくしてくれたと思うし、心をなごませてくれた。

劇場の看板を見上げながら、「赤いりんごに唇寄せて」の歌声を自転車を止め、聴き惚れる数人がいつもいるのだった。

弘前のあらゆる建物は、庇が長くでている。「こみせ」といわれる、いわば通路のスタイルである。この「こみせ」が連結していて買い物に来る人も、通勤の人も、バスを

待つ人もみんなこれを利用している。「こみせ」の造りは非常にありがたい。雪が降っても、これで雪をよけ、買い物ができるからだ、反面、「弘前デパート」には人が寄ってこないのだ。

　ふる里の味覚を思いだす。うまいものはいくらでもある。ホッケ、ハタハタ、ホタテなど。混ざりけのない地酒は、おちょこで四、五杯で「グラっ」とくる。市内には飲み屋が多いのが、また弘前の特色だろう。当時は津軽三味線や民謡を聴かせてくれる店もあった。
　郷土のゆたかな味といえば、やはり漬け物だろう。秋から冬にかけての味である。どの家でも十一月に入ると、この準備をする。樽を天気のよい日に太陽に晒し、天日に干すのだ。
　わたしたちが食べていた漬け物を「ナタ漬け」という。大根などを鉈や瀬戸物のカケラで乱切りにする。麹（こうじ）と塩を入れ、重しとなる石をのせる。暮れから正月にかけてが、ちょうど冬場の食べ頃となる時期だろう。素朴でうまいものといえば、この漬け物の右に出るものはない。

　春のリンゴの花が咲く頃の岩木富士は、白い布団を着て、いまだねむりからさめやらない光景が空にある。白いリンゴの花が咲く頃はまだ、朝夕の気温がまだまだ低いのである。花は光に輝いて凛、としてあまい。あの薔薇の芳香にも似たかおりが、リンゴ畠のそこかしこに充満する。なんとなくあまいかおりに酔っ払う。そしてこのあと、咲いた花の受粉作業が待っている。これが終わると夏のねぶた祭り、そして実りの秋。
　リンゴは赤々と実って、空に浮かぶ岩木富士の姿と重なりあって美しい。苦労は多いが、この生活は楽しい。「人生の楽園」はここにある。